

事業報告書

事業名	ろう者と聴者が共同する人形劇「デフ・パペットシアター・ひとみ」体験ワークショップ
【計画時の事業目的(取組課題)と実施効果】	
【事業目的】 ろう者は「見えない障害」と言われていて、日常生活の中で周りに助けに気づかれにくい・対処してもらえない場合があるので、地域の中での障害に対する理解が必要になっている。しかし、ろう者と聴者のコミュニティは未だ分断されがちで、地域内での理解の機会が少ない現状がある。そのために、地域でろう者と聴者の出会う場、交流の場を積極的に創出する必要がある。本事業では、ろう者と聴者が共同する人形劇団デフ・パペットシアター・ひとみ(川崎市拠点)によるワークショップを実施する。参加者がワークショップを通して、ろう者と聴者の共同の芸術活動を体験することで、芸術を通じたフラットなコミュニティを創出し、地域の中でのろう者と聴者の相互理解の機会につなげていくことを目的とする。	
【実施効果】 1、芸術的共同創作を通して、地域のろう者と聴者が出会う機会と場の創出。普段出会わないお互いの文化を知ったり、新しい表現を発見するなど、アートを通してお互いのことを理解し、興味を深めるきっかけとなる。また、講師であるデフ・パペットシアター・ひとみの活動は共生そのものであり、その活動と創作過程が、地域の中での共生のヒントになる機会を期待する。 2、表現することの楽しさを体験し、自信をもってもらう機会となる。聴者の中で、「話をする」とが苦手な人や、ろう者でも「手話」で表現することが苦手な人も多くいる。様々な方法で自分を表現することに挑戦することで、自分自身の新たな一面を発見し、表現することの楽しさを感じてもらう。また、それを周囲に発表し、プロからの講評を受けることにより、講座終了後も自分自身への自信につながっていく。 3、地域内での広がり期待 ろう者と聴者の共同する芸術団体は国内でも珍しいので、川崎発のボーダレスな芸術活動のロールモデルとなることを期待する。また、本講座では川崎市聴覚障害者情報文化センターと連携し、積極的にろう者への呼びかけをし参加を促していく。また聴者でも、多様なコミュニケーションが必要とされる外国ルーツの人や、貧困の環境下に居る子供達へのアクセスとして、国際交流センターや川崎市市内の子ども食堂等の団体へ積極的に働きかけることで、より地域の多様な出会うの機会を広げていく。	
【実施結果(成果)】	
「つくってみよう！体験してみよう！2日間ワークショップ」 日時:2021年2月13日(土)・14日(日) 各日14:00～16:00 会場:川崎市国際交流センター ホール 参加人数:各日参加者30名、見学者 計4名 講師:デフ・パペットシアター・ひとみ4名 チラシ発行部数:計4300枚 配布先:川崎市聴覚障害者情報文化センター/NPO 法人川崎市ろう者協会/国際交流センター(日本語講	

座)/外国人市民代表者会議/情報プラザ(中原区役所、市民館、図書館、生涯学習財団)/中原区内の子ども文化センター/川崎市立聾学校(2回配布)/人形劇団ひとみ座公演(25回)/現代人形劇センター公演(4回)/NPO 法人川崎寺子屋食堂/劇団 DM/日本ウニマ季刊誌

実施内容:

◆1日目 14:00~16:00

「デフ・パペットの人形劇を見る」…導入の後、手で何が表現できるか、アイデアを出し合います。その後、台詞のない人形劇を鑑賞してもらいます。

「じっさいの舞台上で使っている人形を体験する」…デフ・パペットの舞台上で使用した様々な人形を1人1体持ち、嬉しいとき等の感情を表現したり、動かしてもらいました。

終了後は、簡単な手話の紹介や、「これは手話でどんな表現？」等の質問タイムを設けました。

◆2日目 14:00~16:00

「オリジナル人形劇をつくってみる」…厚紙、新聞紙など身近な材料を使用してオリジナル人形を創作しました。作った人形をみんなに見せて、2人1組で簡単な人形劇を発表しました。発表の際は、人形の向きなど、参加者の年齢にあわせた講師のアドバイスを実施しました。

【実際の効果と課題】

【効果】

1、今回の参加者は、会場の国際交流センター近隣在住の方が多かった。ろう者との接点は普段少ないものの、手話に接したことが有る人は過半数であった。アンケートには、「ろう者の講師の表情が豊かだった」「ろう者との初めてのふれあいとなった」「手話を少し覚えられて嬉しかった」等の声があった。ワークショップの中でろう者の講師による手話に触れ合う時間を積極的にとることで、地域の人々の手話に対する興味や、障がいに対する壁を取り払える時間となったと考える。

2. 実際に舞台上で使用した人形に触れたりする時間を持つことで、「コロナ下でも本物を体験することが出来嬉しかった」という声があった。人形創作の時間では、参加者のこだわりを尊重し、あえて自由度の高い素材を使用したので多種多様な人形が出来て、それをお互いに見せ合うことができた。

3、今回のように、2日間かけてじっくり実施する地域の中でのワークショップは久しぶりの事で、初めてデフ・パペットに触れた人も多かった。広く広報が出来たことは、今回の参加者の幅を広げることが可能となったと考える。

今回、聴覚障害者関係団体に呼びかけを積極的に行ったものの、聾者の参加申し込みが無かった。原因のひとつに、聾学校でのコロナ濃厚接触者の発生や、緊急事態宣言による自粛要請が考えられる。

しかし、今回ろう者と聴者が共に活動している芸術団体と触れ合う機会を地域で創出できたことは、地域の中の相互理解につながる効果があったと考える。

【今後の課題】

今回の実施の様子を広報することで、障がいのある当事者らにとってのワークショップに対する抵抗感をすこしでも軽減できればと考える。また、引き続き劇団の他事業の案内や、聾学校関係者とのやり取りを重ねることで、今後の展開に繋げていく。